

Stage9

The Deadly BOOMSLANG

死をもたらすブームスラン

作・ミカエラ・モーガン

絵・エマ・ショー＝スミス

<読むまえに>

お子さんが読むまえに、この本についてお子さんと話すといいでしょう。

- ・表紙と裏表紙を見てタイトルについて話してください。boomslang (Boo-um-slung)の発音の練習をお子さんにすすめましょう。
 - ・boomslang はどんな種類の生き物だろうかということを話してください——絵やタイトル、裏表紙を参考にしましょう。
 - ・2-3 ページを開いて、物語の設定について話してみましょう。
 - ・この本がどんな本だと思うか、お子さんにたずねてください。
- 自分のスピードでこの本を読めばいいよと、お子さんにいつてあげましょう。

<ひっかかることば>

ここにあげるのは、お子さんがこの本を読むときにひっかかりそうなことばです。

chief 首長

boasted 自慢した

slithery ツルツルした

stomping 足を踏みならすこと

knowledge 知識

twittering さえずり

scurrying 動き回ること

swelling ふくらませること

[p. 1]

死をもたらすブームスラン

作・ミカエラ・モーガン

絵・エマ・ショー＝スミス

[p. 2]

<女の子に、男の子、よく聞きなさい！

さあ、静かに！ おしゃべりをやめて！

おばあちゃんも、おとうさんも、おかあさんも、いらっしやい、

みんなのためのお話だよ！

まわりに集まって、そこにすわって。

お話のはじまり、はじまり。>

「今日は」と語り部が言いました。「わたしたちの偉大なリーダーを見つけたときのお話だ」

[p. 3]

1章——おそろしく、ひそやかなへび

長老が亡くなったときのことでした。村人たちは、新しいリーダーを必要としていました。

「大きくて、強いおかたが必要じゃ」とある村人が言いました。

「賢いおかたが必要じゃ」と別の村人が言いました。

ひとりのおばあさんが、きっぱりと言いました。「わたしたちが必要としているのは、わたしたちのために、はっきりと大きな声で話してくれるおかたじゃ……」

[p. 4]

そのおばあさんが話し終わらないうちに、大きな、やかましい少年が叫びました。「ぼくがやる！ ぼくは話がうまい。勇敢だ。友だちもたくさんいる。ぼくには大きな心と、大きな考えと……」

「それに大きなことを言う口かい……」とおばあさんはブツブツ言いました。

「ぼくが、どんなに勇気があるかってことを見せてあげるよ」と少年は自慢げに言いました。

「何か任務をくれれば、ぼくはやってみせるよ。ぼくにはこわいものなんて、ひとつもないんだから！」

[p. 5]

さて、そのころ、村には問題がひとつありました。これが、その問題でした：

<それは音もなく、ツルツルとして、ずる賢く、うろこに覆われて、おそろしく、ひそやかな、死をもたらすへびだったのです！>

[p. 6]

そいつは悪いへびでした！ その毒牙にかまれたら、もうおしまいでした。そのへびは死をもたらすブームスランで、川へ続く道の近くに住んでいました。それまでに、3人の村人がこのへびにかまれていました。その村人たちはすでに亡くなっていました。

[p. 7]

残った村人たちはこわがって、日陰の多い、木の生い茂る道を歩いて川へ行くことができませんでした。

村人たちは、大きな、やかましい少年に何をしてもらいたいかわかっていました。

「おまえの任務は、あの死をもたらすへびをひつつかまえてくることだ」

[p. 8]

「かんたんさ！」と少年は言いました。「こわくなんかないし、助けてくれる友だちもたくさんいる」

そこで、少年と仲間たちは、足をドタドタ踏みならし、叫んだり、歌ったりしながら、その道へ向かっていきました。

<おまえなんか、こわくないぞ！>

<そんなに自分が強いと思ってるなら、こっちへきてかんでみろ！>

<おまえなんか、ちっともえらかないぞ、へびさんよ！>

<今からおまえをつかまえにいくぞ！>

一日中、少年たちは足を踏みならし、叫びました……でも、へびを見かけることすらありませんでした！

！

[p. 9]

次の日、2番目の少年が言いました。「ぼくりーダーになりたい。ぼくに行かせてよ。ぼくはあのへびをつかまえるうまいわなをつくれるんだから！」

「行かせてやれ！」と村人たちは言いました。

「よし」とおばあさんは言いました。「でも、まず言うておきたいことが……」

2番目の少年は聞いていませんでした。わなを考えるのに夢中だったのです。

[p. 10]

これが、その少年の考えたわなです。

<へびのわな

このひもをひっぱってわなの入り口を閉じる。取っ手としても使う。

こっち側はふさいでおく

筒の入り口

へび

丸太を半分に切って、中をくりぬいて、ひもでひとつにしぼる。

小枝で、わなの入り口を開けたままにしておく。>

よくできたわなでした。適した木と頑丈なひもできていました……が、まったくうまくいきませんでした！

その日おそく、少年が戻ってきましたが、つかまえたものといえば、とても臭いネズミ1匹だけでした。

[p. 11]

つぎに3人目の少年が名乗りをあげました。「ぼくがへびをつかまえてみたい！」と彼は言いました。

「おまえは立派なリーダーには見えないな！」と村人たちは言いました。「とても背が低いし——それにおまえはおとなしい」

それでも、とうとう村人たちはその子が挑戦することを認めました。

「聞くのじゃ！」とおばあさんは言いました。その小さな少年は耳をかたむけました。他の挑戦者たちとおなじように、歌ったり、踊ったり、豪語したりできたはずなのに、一晩中、少年はじっとすわっておばあさんの話を聞いていました。

[p. 12]

これが、おばあさんの話した内容です：

「わたしは長いこと生きとる。何匹も何匹もへびを見てきた。鳥のように飛ぶのやら、黒いのや

ら、目の見えないのやら、いろんなヘビがおった。岩地のヘビや水にすむヘビもおった。それから、木の上に住むヘビもおった。それが、ブームスランといわれるヘビじゃ

[p. 13]

「ブームスランは」とおばあさんは言いました。「大きくて、ずる賢くて——それに死をもたらすのじゃ。毒牙でひとかみされたら、おまえさんはおだぶつじゃよ」
「そんなヘビに立ち向かうおまえさんにとって、最大の武器は『知識』なんじゃよ。立ち向かうものすべてを知っておかにはあならん」

[p. 14]

少年は耳をかたむけつづけました。
「まず、最初に知っておかにはあならんのは」とおばあさんは言いました。「とにかく、じっとして、静かにしておくことじゃ。ブームスランは、おまえさんが歩くときに大地が揺れるのを感じとる。そして、隠れる。だから、あの、やかましい少年は見つけられなかったのじゃ」

[p. 15]

「次に知っておかにはあならんのは、このヘビは木の上に住んどるということじゃ。だから、地面にわなを置いたってうまくいかなかったんじゃよ。ブームスランは木の上において、鳥の卵を食べるのが好きなんじゃ」
おばあさんは、一晩中話しつづけました。
なんと、そのおばあさんは説得力があったことでしょう！
少年は耳をかたむけました。

[p. 16]

2章——ブームスランを捕らえる
次の日、少年は出発しました。少年は、あるものを入れた布のカバンを持っていました。カバンの中には何が入っていたと思いますか？ なるほど！ それは、あとのお楽しみです。

[p. 17]

少年は小道近くの木のところへ行きました。そして腰をおろしました。静かに、おとなしく、少年は耳をすませていました。彼にはこんな音が聞こえました：そよかぜが草をやさしく通り過ぎていく音、小鳥のさえずり、虫たちがあちこち動きまわる音。そして、ほかの音が聞こえました。

[p. 18]

それは、静かなシューツという音でした。
少年は見上げました。細い、茶がかかった緑色の枝がかすかに動くのが見えました。でも、それは枝ではなく、あのヘビだったのです！
今、ヘビは木を滑り降りてきて、少年のほうに向かってきました。首のあたりをふくらませて、まさにかみつこうとしているところでした。

[p. 19]

少年はカバンの中に手をもぐりこませました。何を持ってきたのでしょうか？

斧でしょうか？

ナイフ？

大きな棒？

ちがいます。

それは……

[p. 20]

卵でした！

少年はヘビのほうに卵をころがしました。ひとのみで、ヘビは卵を食べてしまいました。すこし太って、動きが遅くなったヘビは、少年のほうにクネクネとはってきました。

少年は卵をもう1個、ヘビに向かってころがしました。ガブリ——2個目の卵が消えました。

[p. 21]

ゆっくりと、静かに少年は立ち上がりました。慎重に歩いて、後ずさりしました。ずっと、ヘビから目をはなさず、ずっと、ヘビに卵をころがしつつけました。ヘビは、ますます太り、ますますのろくなっていききましたが、それでも向かってきつつけました——はるばる村まで。

[p. 22]

「あの背の低い男の子はヘビなんか持ってないぞ」と村人たちは笑いました。

そのとき、少年の背後に、草を抜けてヘビがはってくるのが見えました。

少年は最後の卵をブームスランに向かってころがし、ヘビは食べるために止まりました。そのとき、少年は空になったカバンをその上に投げました。ブームスランは食事をして満腹で、カバンの日陰の下でじっとして、眠くなっていました。

「みなさんのヘビです」と少年は言いました。「死をもたらずブームスランで、ぼくがつかまえて、みなさんのところに連れてきました」

[p. 23]

語り部が両手をたたきました。「こうして、話をよく聞いた少年は、わたしたちの偉大なリーダーになりましたとき！」

「これで、わたしのお話はおしまいだよ、女の子に男の子。」

さあ、もう立ってさわいでもいいよ。

新しいお話、古いお話。」

賢い子どものお話、大胆な英雄のお話。

ほんとうにたくさんのお話があるんだよ……

でも、それはまた今度。

[p. 24]

知っていましたか？

文字が発明される以前、人びとは物語で楽しませたり、人生の教訓を伝えていました。物語

は記憶されて語られ、世代から世代へと受け継がれていきました。だから、おなじ物語でもちがう種類のものをよく耳にするというわけです！

ブームスランの知識

- ・ブームスランとは「木のヘビ」という意味です。
- ・これまでに発見された最大のブームスランは、長さが1.8メートルもありました！ 長イスとおなじくらいの長さです！
- ・ブームスランの皮は、『ハリー・ポッターと秘密の部屋』に登場する「ポリジュース薬」をつくるのに使われた成分のひとつです。

ヘビのジョーク

Q: ヘビの得意科目は？

A: 歴史 (hissssstory=ヘビの立てる「シューツ」という音 hiss から)。

Q: 数学の得意なヘビは？

A: マムシ (adder=マムシ。add「足し算」)。

Q: 赤ちゃんヘビかどうか、どうやって見分ける？

A: ガラガラを持っているかどうか。

<読んだあとで>

読んだあとで、この本についてお子さんと話しましょう。こんな質問をしてみましょう：

- ・最初の少年は、どうしてヘビをつかまえられなかったんだろう？
- ・2 番目の少年は、どうしてヘビをつかまえられなかったんだろう？
- ・3 番目の少年は、他のふたりの少年とどのように違っていただけだろう？
- ・この本は気に入った？ その理由は？

この話をまた読んでみようとお子さんにすすめてください。読む自信をそだて、つかえずに読めるようになります。

<ほかにすること>

お子さんと好きな物語について話してみましょう。どうして、そのお話を何度も繰り返し聞くのが好きなのでしょう？ お子さんに好きなお話を自分で話してもらいましょう。弟さんや妹さんに話すのもいいですね。